勉学と卓球に打ち込み、子供時分より“粘り強さ”を発揮

弁護士、ゴルフジャーナリスト。西村國彦の名刺には、2つの肩書が記されている。40歳から始めたゴルフに魅了されてからというもの、西村の“戦場”は公私共にゴルフ場となった。バブル崩壊後、相次いだ日本の大型ゴルフ場倒産事件は、ハゲタカ金融筆者たちの狩場と化したが、西村は、その法的再建問題に敢然と立ち向かってきた。またプレーヤーとしては、難コースとして名高いニュー・セントアンドリュースゴルフクラブ・ジャパンのクラブチャンピオンに輝いたほどの腕前で、ゴルフジャーナリストとしても健筆をふるう。どちらも“戦いの場”。拳を上げて語る熱血漢ではないが、生来負けず嫌いの西村は「難攻不落に思えることほど燃える」。どんな苦境でも決してあきらめず、粘り強く戦い抜く——西村の真骨頂はここにある。

●

今はゴルフ一筋ですが、子供の頃から球技が好きなんですよ。僕らの世代だとサッカーはまだメジャーじゃなかったし、やっぱり野球人気。でも僕は、丸刈りがイヤでね、熱中したのは卓球です。室内競技でしょ、夏なんかは日差しを防ぐためにカーテンを締め切るから、それはそれで過酷なスポーツではあったんだけど……。

僕は、父が教員をしていた中・高一貫校である桐朋学園に通いながら、けっこう真面目に勉強にも卓球にも打ち込んでいました。中学2年の時のこと。都内中学校の卓球大会があったのですが、僕は、優勝候補だった3年生を相手に2回戦で惜敗。それが悔しくてねえ。よほど刺激されたのか、負けず嫌いなのか、その悔しさを翌年まで胸に刻んだ結果、翌年の私学都大会では個人も団体戦も総ナメですよ（笑）。リベンジを果たしたわけです。もう大昔の話だけれど、今でも試合のあった国立競技場の辺りを通ると、厳粛な気持ちになるんです。「志を持って必死にやっているか。途中で投げ出していないか」。そう問われているような気がして。僕の起点はここにあるのでしょう。

始めたら何でも一途にやるというか、粘り強さは子供の頃からありました。加えて団塊の世代です。受験も含め、競争、競争のなかで生きてきたから、「やる以上は勝ちたい」という負けず嫌いな部分が強い。もっとも、性分としては、ほにかみ屋で、できるだけ目立たないように振る舞っていたんですよ。しゃべるのも苦手、講演なんて絶対にできないようなタイプだったのに、今、弁護士としてあちこちで登壇しているんですから妙な感じです（笑）。

●

西村がパートナーを務める「さくら共同法律事務所」の代表弁護士・河合弘之氏とは、実に55年の付き合いだという。中学から大学まで同窓であり、卓球部では先輩後輩の関係。西村が弁護士を意識するようになったのは、先輩・河合氏の影響が少なからずある。一貫して学業優秀だった西村は、東大法学部にストレートで進学した。

ものをコツコツ調べたり書くのは得意だけど、僕に営業的センスはないし、酒も飲めず付き合いも悪い。勤め人には向かないだろうと思っていたなか、それでも食えるとしたら弁護士かなぁと。法学部に統った動機は、あまり褒められたものじゃないんですよ（笑）。

大学に入ってからも、勉強と卓球に打ち込んでいましたが、3年生になった頃から東大闘争が激しくなってきて、講義どころじゃなくなった。法学部から、安田講堂に立てこもった学生が20人もいた時代です。僕は基本ノンポリで、直接的な活動はしなかったけれど、シンパシーを感じていたから影響は受けています。公安に逮捕された連中に接見しに行くとか、面倒を見るとか、弁護士になる前から救援活動的なことをしていました。

司法試験に向けては、同期の仲間たちと勉強会を立ち上げてやったものの、

私立国立学園小学校では、「神童」と呼ばれたことも。その後、桐朋中学・高等学校へ進学。だんだん「普通の人」に・

西村氏の両親。父は桐朋中学・高等学校の社会科教師だった

1947年6月17日、東京・国立市にて誕生

人生の軌跡

My Back Pages